

國學院大學學術情報リポジトリ

久留米文化財収蔵館寄託「合戦絵巻」(『平治物語絵巻』「六波羅合戦巻」模本)について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 悦子, Ito, Etsuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000257

久留米文化財収蔵館寄託「合戦絵巻」 （『平治物語絵巻』『六波羅合戦巻』模本）について

伊藤悦子

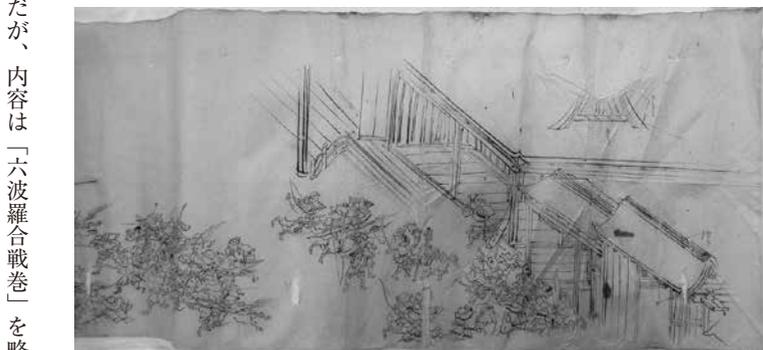
一、はじめに

十三世紀の成立とされる『平治物語絵巻』（『平治物語絵詞』）は、「三条殿夜討巻」（ボストン美術館所蔵）、「信西巻」（静嘉堂文庫所蔵）、「六波羅行幸巻」（東京国立博物館所蔵）の三巻および「六波羅合戦巻」の断簡（十四図と四行の詞書）が知られている。「六波羅合戦巻」の全容は、東京国立博物館が所蔵する白描模本（以下、東博本と記す）等によって、ある程度把握することが出来る。

「六波羅合戦巻」は、これまで原本である断簡についての研究は進められてきたが、模本については、代表模本である東博本が補助資料的役割で取り上げられる程度で、その他の模本、あるいは模本全体についてはあまり触れられることがなかった。^①ところが、二〇一四年に新たな模本が早稲田大学図書館に収蔵（以下、早大本と記す）され、滝澤みか氏によって早大本の調査報告、並びに模本の伝本整理がなされた。^②氏によると、現在までに知られている模本は早大本を含め十四点あり、奥書に森井善太郎・千賀義徴の名を有している義徴模写系統の模本が多いという。それに対し、早大本は森井善太郎のみの名を記

す特異な模本であると
する。東博本は詞書三
段、絵四図で構成され
ており、東博本を完本
と考えた場合、現存模
本のうち完本と呼べる
ものは少ない。たとえ
ば横浜市歴史博物館蔵
本は詞書が無く、宮内
庁書陵部本は第四図の
みである。

さて、久留米文化財
収蔵館には「合戦絵巻」
(資料番号[B]1986-001-
1883)と題される資料
が保管されている。内
題・外題は無く、資料
名が「合戦絵巻」であ
るために、今日まで知
られることがなかったのだが、



【図1】久留米本「六波羅合戦巻」

内容を「六波羅合戦巻」を略式

に模写したものであり、いくつかの問題を除けば完本である。
全体の様子から、短時間で慌ただしく模写したものと考えられ
る。寸法は縦二七・〇×横六一七・〇cm^③で、軸や裏打ちなどの装
丁はなく、紙質は楮紙と思われる。十八紙が貼り継がれており、
一紙目の幅のみ約二七cmで、他は概ね三八・五cm前後である。
第一紙が剥離しているなど保存状態はあまり良いとは言えない
が、多少の虫損があるほかは特に問題ない。縦幅は東博本より
十五cm程小さく、絵は天地共に余白がある。秋山光和氏による
と、東博本は断簡から割り出した原本のサイズより「九割五分
の縮写率を示す」とのことなので、「合戦絵巻」は更に縮写さ
れていることになる。

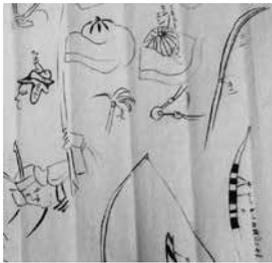
収蔵館には、久留米藩御用絵師であった三谷家によって膨大
な数の絵画資料が寄贈・寄託されている。これら三谷家の資料
は、久留米市教育委員会が調査報告書^⑤に纏めているが、基本的
な書誌情報の記載にとどまる。この「合戦絵巻」という資料名
も、おそらく報告書作成段階では典拠が不明だったことによる
のだろう。稿者は二〇一四年四月に約六十点程の資料を調査し
たが、源平関連と思われる絵画資料も少なからず存在しており、
「合戦絵巻」(以下、久留米本と記す)もそのうちの一点である。

二、全体の構成

全体的な構図を東博本と比較すると、久留米本には大きな異同が二つある。一つ目は絵の位置で、両本を比較した全体図を【図2】に示したが、東博本の第一図の後半にあたる部分が、久留米本では第三図の直前に移っており、絵は不自然に分断されている(【図3】【図4】)。二つ目は、東博本の第四図に当たる絵の後ろに、猛火、奥書、素描があることである。素描は、基本的に絵巻の人物や武器の一部を抜き出し、詳細にデッサンしているものである(【図5】【図6】)。なかには場面の特定が困難な素描もあるが、東博本には描かれていない装束の模様が描かれている箇所もある。

				東博本			
				第一図	第二図	第三図	第四図
				①	②	③	④
				久留米本			
素描	奥書	猛火	第四図	第三図	第二図	第一図	第一図
			④	③	②	①	①

【図2】全体図



【図5】素描



【図3】第一図①



【図6】素描



【図4】第一図②

絵の分断に関しては、本来は東博本(他の模本も同)の方が正しいはずだが、久留米本は何故このような配置にしたのだろう

ろうか」と推測している。

この他、模写者らしき人名が記されている模本に、東京芸大
大学美術館本（木村立嶽、天保十四年一八四三年、関保之助氏旧蔵本（稲葉通邦、十八世紀後半か）、一
澤久夫氏蔵本（有信か）、真田宝物館本（高川文筈、十九世紀中頃）がある。
転写時期は始どが十八世紀半ばから十九世紀半ばであり、この
期間に広く流布していたことが分かる。ただし、鈴木敬三氏は、
「六波羅合戦巻」が俵屋宗達・狩野探幽・谷文晁らに粉本とし
て利用されていることから、「平治絵中殆ど此の巻だけに限ら
れて居ることは、特に此の巻の内容が相当広く一般に流布され
て居たことを推測させる」と述べており、近世を通じて流布し
ていたと考えられる。

次に、久留米本の奥書を記す。落款印や花押は無い。

土佐古将監之圖

元和三年森井善太郎寫

江春略寫之

御繪所土佐守将監之真筆上古之姿星霜數百年を

隔るといへとも今昔の有様を見るか如し土佐代々其画

多しといへとも中興刑部大夫光信より残りて上代之祖伝

筆跡世に伝る事希なり往古は本朝の画大和繪の四宗而
己にして九重の雲の上には餘流の翫なきにやいにしへは
其画をもて文辭の及はざるをしらしめむかために實を
のみ画きしなるへし土佐家代々其畫法正しくして假初
にも飛毫靈峯を画す人物猶其辺且委しくして貴賤
の躰自侍りぬ其勢自然の形にして求めるの形なし是土佐
家の術なり尤數百年を経しゆへに其本画分明ならざる
所多し古将監之真筆は其おそれすなからすと雖とも
これを写してみたらに丹青を用ひ早ぬ上代土佐の比は
朱印をもちひす實名をのみしるすと見えたり



【図7】奥書

久留米本も、森井善太郎が模写した元和三年本系統の模本であるが、千賀義微の名は無く、元和三年本から江春が直接模写したらしい点は他本と異なる。江春については、三谷家ゆかりの人物のようであるが、三谷系図には見当たらない。だが、三谷家には江春筆の絵画資料が他に二点存在しており、その署名から天保・嘉永頃の人物であることが分かる。

注目すべきは、久留米本の奥書には、他本には記されていない元和三年本および土佐古将監真筆本に関する記述があることである。土佐古将監真筆本が成立から数百年を隔てており、損傷が激しいため絵が分明でなかったことや、元和三年本は絵の具を用いた、つまり彩色されていたことなどが記されている。とすれば、元和三年本は、真筆本の絵が不明瞭な箇所にも多少の異同があるのだろう。記述を信じれば、この奥書は本奥書で森井善太郎が記したことになるが、問題は、久留米本の粉本にこの記述があったのか、それとも江春の加筆によるものなのかどうかである。だが、急いで模写している江春が創作したとは考えにくく、誤写と思われる箇所もあることから、粉本に書かれていた可能性が高いだろう。他の模本が数度の転写によってこの記述が抜け落ちていたのだとすれば、久留米本の粉本は、元和三年本そのものか、それに近い模本であったと考えられる。

また、土佐古将監についても誰を指すのか分かっておらず、土佐光信であるとする伝承もあるが、この奥書を信じれば光信よりも古い時代の人物ということになる。他の模本には、元和三年本および土佐古将監真筆本についての情報は一切なく、たとえ伝承の域を出ていないとしても貴重な情報といえる。

それでは、仮に粉本が元和三年本であったとすれば、どのような経緯を以て久留米に入ったのだろうか(場所が明記されていないので、必ずしも久留米で模写したとは断定できないが)。三谷家は狩野派の久留米藩御用絵師である。狩野派一門や藩主有馬氏を通して入手した可能性は高いだろう。これまで述べた通り、久留米本は急いで略写されたと思われることから、粉本は一時的に貸し出されたか閲覧が許されたものであり、手許に置ける時間が限られていたと考えられる。可能性の一つとしては、江戸に出仕している久留米藩士を通しての入手経路も考えられる。宮内庁書陵部本の模写者である松岡辰方(一七六四—一八四三(一八四〇とも)¹⁰)は久留米藩士であり、塙保己一の門弟として江戸の和学講談所で『群書類従』編纂にも関わっている。後に有職故実の大家となり、幕府にも召されたという。辰方が写した書陵部本は第四図のみで、絵の特徴も東博本系統であるため、久留米本の粉本は辰方が見た「六波羅合戦巻」で

はない。辰方と江春は時代がある程度重なり、直接的な関わりがあったかどうか分らないが、模写者が分かる数少ない模本のうちの二本が久留米藩にゆかりの人物であることは、留意すべきであろう。

四、詞書

《第一段》

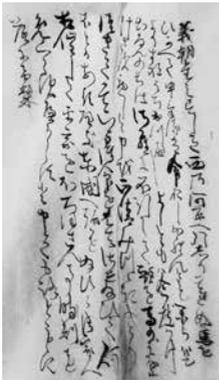
義朝たえすして西の河原へ引しりそきぬ馬を
ひかへて申けるは命おしからんともからは是
よりすなはちおつへしよしともは今度かけ
出なんのちはさらに不引して頭を馬のはなに
けさすへしと申を正清みつ、きにとり
つきてた、いま御命をはてさせ給ひて何
ほどかあるへき東国へ赴かせ給ひて御家人
相催して平家をほろぼさん事時刻を
めくらすへからすと申てもろともに
落にけり

《第二段》

鎌田兵衛申けるは守殿はおほし召旨ありてひかせ
給ふなり正清は御供つかまつり殿原はしはしふせき
箭射てのはしまいらせよ心さは御供におとる
へからすといひければ五十餘騎のこりと、まりて
矢たねのあるかきり心をひとつにしてふせき
た、かふ惣方こゝにて多くうたれにけり

《第三段》

信頼卿の宿所三箇所并義朝か六條堀河
の家をやきはらふあいた餘盡数十町におよふ
咸陽宮の煙のことし



【図8】 詞書第一段

久留米本と早大本の詞書は同文であり、漢字・仮名の使用箇所も同じで字母も一致する箇所が多く、両本が同じ粉本に遡れ

ことは疑いない。大きな違いは、早大本には絵巻の冒頭部に流布本的本文による『平治物語』のあらすじが記されている点であるが、他の模本には記されていないことから、おそらく早大本の加筆であろう。また、改行の位置が異なるのは、久留米本の都合によるものであろう。久留米本の詞書は余白がほとんどないので、紙の寸法に合わせて改行したと考えられる。

五、久留米本と早大本の関係

— 絵の部分に関しても、久留米本と早大本は概ね一致している。

久留米本は略写であるため、装束の模様などはほとんど描かれておらず、写し忘れと思われる箇所も見受けられる。また人物の位置などにも多少のずれがある。そのため、細部の異同を確認することは不可能であるが、構図そのものはかなり正確に模写されている。滝澤氏の指摘による、早大本が他の模本と異なる箇所を簡条書きにあげておく。

①人名の記載。早大本は無記名の短冊が附されているのみである。東博本には清盛・義朝・正清・金王丸・重成、原本の断簡には清盛の名がある。

②第三図(④まで同)。「日本絵巻大成13」に掲載された断簡⑨

「三条河原の決戦(4)」には、図左上に武士が描かれているが、早大本には描かれていない。

③図中央一番上の武士が背負う弓矢が早大本には描かれていない。

④その下に位置する武士の背に、早大本では折れた矢が刺さっていない。

⑤第四図(⑨まで同)。一軒目の宿所焼討場面、早大本には炎の中に不自然な人物が描かれていない。

⑥早大本は猛火の描写が激しい(他の模本は炎が途中で途切れている)。

⑦塀の脇から邸内を覗く武士が、断簡は右足、模本は左足を上げている⁽¹⁾。早大本も例外ではない。

⑧二軒目の宿所焼討場面でも、早大本は猛火の描写が激しい。

⑨早大本は、第四図の後に猛火のみを描く。

⑩早大本は、血の描写が著しい

①について、久留米本には第三図に「正清」の名のみが記されており、短冊を表すと思われる線も記されているが、他の人物に対しては何も記しておらず、短冊があるべき位置の背景が描かれているので、粉本にも短冊がなかったと考えられる。この点はいずれの断簡とも異なっている。ただし、東博本は基本

的に人名を四角の枠で囲んでいるにもかかわらず、正清の名のみは囲んでいないことが気になる。あるいは、正清の名は他の人名とは別の時期に付され、元和三年本には正清の名のみが記されていたのであろうか。

絵の描写である②③④⑤⑥⑦⑧に関しては、久留米本と早大本はすべて一致している（早大本の④の武士は額に矢が刺さっているが、久留米本は額の矢を描いていない。しかし、額から激しく流血している点は一致しており、久留米本は単純に矢を描き忘れたのだろう）。⑤は特に留意すべき箇所、東博本系統の大きな特徴の一つとして、燃えさかる炎の中に無表情な武士の上半身が描かれている。明らかに不自然な描写であり、原本に描かれていたとは考えにくい。おそらく早大本や久留米本の描写が本来の姿であり、古態を示していると考えら



【図9】 猛火

れる。⑥で炎が途中で途切れている描写もやや不自然であり、この点も早大本や久留米本の方が古態の可能性が高いであろう。⑨の、他本には見られない激しい猛火の描写については、滝澤氏は早大本による独自の加筆の可能性も指摘していたが、久留米本にも構図が一致する猛火が描かれており（図9）、粉本に既に描かれていたことが分かるのである。

では早大本が久留米本の粉本の可能性はあるのかということ、前述した通り、久留米本には早大本には無い本奥書がある。逆に、略式模本である久留米本を粉本として早大本が描かれるとも考えられず、又、早大本の配色と久留米本の色注などにも異同が見られるので、両本の直接的な関係はないだろう。

このほか、久留米本には第四図に注目すべき特徴がある。門の脇に騎馬武者と長刀を持った武士が並んで立っており、武士と馬の足の間に背後の建物が描かれているが（図10）、そこから線を延ばし、線の先に建物の拡大図を描いているのである（図11）。この拡大部分は、早大本では武士の両足の間の背後にも似ており、線の位置を間違えた可能性もあるが、粉本を忠実に模写しようとする久留米本の姿勢を示すものといえよう。注目すべきは、久留米本は他本とは異なり、長刀の柄を馬の胸がいの位置より下は描いていないことである。東博本や早大本

では武士と馬の足の間には武士の持つ長刀の柄が描かれているが、原本の断簡は久留米本と同じく長刀の柄の下部が描かれていないのである。つまりこの箇所に限って言えば、久留米本のみが原本(断簡)と一致しているということになる。



【図10】第四図



【図11】拡大図

以上のことから、久留米本・早大本は粉本を忠実に模写した同系統の模本であり、東博本系統よりも鎌倉時代の原本の姿を留めている可能性が高いと考えられる。東博本系統の、炎の中に無表情の武士が描かれていたり、炎が途中で途切れている場面は不自然であり、東博本系統の方が、後から改変・削除(もしくは欠落)したと考えられるのである。おそらく、久留米本・早大本のみが持つ猛火の場面は、原本にも描かれていたのだから。

六、五条橋の素材について

もう一点、重要なことなので指摘しておきたい。第一図②には、東博本・久留米本(図4)共に六波羅邸の門外の垣楯が描かれ、その間から平家軍が出撃している。『平治物語』に、「左馬頭義朝、六条河原へ押寄で見ければ、六波羅には、五条の橋をこぼちよせて、垣楯搔てまうけたり。」とあるのがそれであろう。この五条橋の素材について、新体系本の注に「梁塵秘抄二に「何れか清水へ参る道、京極くだりに五条まで、石橋よ」とあり、当時は石造りであったか。また、石橋となったのは、この後の造作とも。」とあり、当時の五条橋の素材が何であったのか明らかになっていない。だが、そもそも垣楯とは、木の枝や板を並べて楯にするものである。いずれの模本の絵を見ても垣楯は石とは思わず、木の板に見える。ちょうどこの付近は、原本の断簡が存在しているのだが、肝心の垣楯の部分が残っていない。ところが、よく見るとほんの僅かであるが、垣楯の一部を確認することができる。構図そのものは模本とほぼ一致しているので、垣楯の欠損部分の描写が模本と著しく異なるとは考えにくい。つまり、平安末期の五条橋は木製であった可能

性が高いのである。少なくとも原本が成立したとされる鎌倉末期の五条橋は木造であり、五条橋の素材を示す現在確認出来る最も古い資料は「六波羅合戦巻」ということになるのである。¹⁵⁾

七、久留米本の色注の特徴

久留米本には彩色がほとんど無く、第四図の一部や猛火に朱や薄墨が入る程度であるが、所々に色注が付されている。色注は建物に多く、屋根や築地などに「朱スミ」「木地」「地ウス、ミアイクマ」などと記されている。装束や武具などの色注は少ないが、旗には「赤」「白」とあり、ごく希に母衣や鎧の草摺糸（図10）などにも色注が付されている。残念なことに、久留米本の色注の箇所は、断簡とはほとんど重ならないため比較ができない。東博本の色注とも重なる箇所はほとんどないが、一致する箇所も見られる。

なお、久留米本は、特に猛火に対して詳しい色注を入れている。④の一軒目の宿所の猛火には「スミクマ二度トリ丹地朱ヌリ又スミクマノ上ニウス朱クマトリ火先マタハスミ煙リニウスコフンニテ夫ニ応シテクマトリスミ落スミコキ朱同断」とあり、⑦の二軒目の宿所の炎にも「コフンクマ火先ニ黄土ノクマ有」

とある。早大本にはこれらの色注が見えないことから、元々粉本にあったのではなく、粉本の彩色を忠実にメモしている可能性が高いと思われる。久留米本がこれほど猛火にこだわる理由は、他の模本には猛火が描かれていなかったからではないだろうか。前述したように、「六波羅合戦巻」の内容は広く流布しており、久留米藩士松岡辰方も書陵部本を模写している。江春も既に炎が描かれていない模本を見ていた可能性がある。だとすれば初めて見る猛火の描写に関心を持ち、念入りに模写した上、写しきれない部分は文字でメモ書きしたと考えられるのである。

八、おわりに

『平治物語絵巻』は、『平治物語』諸本の第二類に位置付けられる重要な資料である。今後、「六波羅合戦巻」の残りすべての断簡が発見される可能性は極めて低く、全容を知るためには模本に頼るしかない。これまでの内容が唯一の系統であり、そのまま原本の内容として受け入れられてきたため、模本の系統についての研究はほとんど行われてこなかった。しかし、久留米本・早大本の出現により、両者が東博本とは異なる同系統の

模本であること、現存する「六波羅合戦巻」の模本が少なくとも二種の系統に分類できることが明らかとなった。しかも、久留米本・早大本系統の方が、東博本系統よりも元和三年本、しいては原本の姿により近い可能性があることは、これまで指摘した通りである。さらに、久留米本のみが原本に一致する箇所もあり、現存模本の中で、久留米本が最も古態を残している可能性が高いのである。また、断簡でもわずかに確認できる垣楯の描写から、五条橋の素材を示す最も古い資料は「六波羅合戦巻」であり、遅くとも「六波羅合戦巻」が成立した鎌倉末期の五条橋の素材は石橋ではなく木製の橋であったことも確認できた。絵画資料を研究対象に加えることによって、文字資料だけでは解明しきれない問題に切り込むことができるという好例であろう。

課題となるのは、模本の両系統とも土佐古将監本の写しであり、原本そのものからではないということである。たとえば冒頭が第一図から始まっているのは不自然であり、おそらく原本には前半部が存在していたと考えられる。今後、更に別系統の模本が発見されれば、これらの問題も徐々に判明していくだろう。「平治物語」諸本を研究する上でも、模本の研究は必要だと思われるのである。

注

- (1) 模本については、松原茂「『平治物語絵詞』の伝来と成立」(『日本絵巻大成13』、中央公論社、一九七七年)、秋山光和「『平治物語絵巻』六波羅合戦の巻」(『日本絵巻物の研究下』、中央公論美術出版、二〇〇〇年)、平野卓治「館蔵『六波羅合戦巻』の基礎的研究」(『横浜市歴史博物館調査研究報告3』、二〇〇七年三月)、「館蔵『六波羅合戦巻』と真田宝物館所蔵の『平治物語絵巻』」(『横浜市歴史博物館調査研究報告4』、二〇〇八年三月)、小林泰三「日本の国宝、最初はこんな色だった」(光文社、二〇〇八年)などがある。
- (2) 滝澤みか「早稲田大学図書館所蔵『平治物語絵巻 六波羅合戦巻』について」(『早稲田大学図書館紀要』62、二〇一五年三月)
- (3) 『久留米藩御用絵師絵画資料目録3(久留米市文化財調査報告書第三十七集)』(久留米市教育委員会、一九八四年)
- (4) 前掲、秋山氏論文
- (5) 『久留米藩御用絵師絵画資料目録1〜4(久留米市文化財調査報告書第三十三・三十一・三十七・三十八集)』(久留米市教育委員会、一九八一年〜一九八四年)
- (6) 三谷家および源平関連の絵画資料については、拙稿「久留米市文化財収蔵館収蔵『平家物語図』・『源平合戦図』について」(『文化現象としての源平盛衰記』笠間書院、二〇一五年五月)で触れた。
- (7) 鈴木敏三「初期絵巻物の風俗史的研究」(吉川弘文館、一九六〇年)
- (8) 江春筆「虎図」「林和靖図」が久留米収蔵館に保管されている。
- (9) 小松茂美氏は土佐光信を想定している。(『日本絵巻大成24 当麻曼茶羅縁起・稚児観音縁起』中央公論社、一九七九年)
- (10) 篠原正一「久留米人物誌」(菊竹金文堂、一九八二年)
- (11) 前掲、鈴木氏の指摘による。
- (12) 佐竹昭広ほか編『新日本古典文学大系43 保元物語 平治物語 承久

記」(岩波書店、一九九二年)。

(13) この他、『日本歴史地名大系 京都市の地名』(平凡社)が「平安末期には石橋がかけられていたらしい」とするのをはじめ、『梁塵秘抄』の記述を根拠として石橋を有力視する研究者が多い。五条橋の素材については、雨野弥生「石橋」考、『梁塵秘抄』三二四番を中心に、『同志社国文学』82(二〇一五年三月)に考察がある。

(14) メトロポリタン美術館所蔵「保元・平治合戦図屏風」にも、六波羅邸の築地の箇所五条橋を壊して組み立てたと思われる木製の垣桶が描かれている(『週刊絵で知る日本史19 平治合戦図屏風』(集英社、二〇一一年)に解説あり)。この屏風は江戸時代前期成立と考えられているが、粉本に「六波羅合戦巻」を利用していることが指摘されている(前掲、秋山氏論文)。

(15) これまで、五条橋の素材が確認できる資料は「洛中洛外図屏風」まで遡らなければならなかった。

(16) 永積安明・島田勇雄校注『日本古典文学大系31 保元物語平治物語』(岩波書店、一九六一年)

※本稿において、画像の撮影・掲載許可を賜りました三谷氏、久留米市教育委員会に厚く御礼申し上げます。奥書や色注の読みや解釈については、都市風俗画研究会において大高洋司氏、水野僚子氏、小島道裕氏、大久保純一氏はじめ、御出席の諸先生方より御教授を賜りました。また、五条橋の素材については、第六回研究会における雨野弥生氏の御発表「院政期の都市表象における一問題―五条橋は「石橋」だったか―」を大変参考にさせていただきました。厚く御礼申し上げます。